2000. 9. 26

庭～ 武満　徹「カトレーン」

あの庭は、今ごろどうしているだろう…。

曲がりくねった海岸沿いの道に車を駆る僕の視界に、その庭は突然現れた。背中を向けてうなだれるその庭は、肩の上に海を載せていた―――少し灰色を含んだエメラルドグリーンの海を。

庭はしかも、まるでジブラルタル海峡に聳える「ヘラクレスの柱」のように、僕の視線を海へ、海へと招じ入れた。車を降りてその門へと歩く道端には、清楚な白い花が咲いていた。その花に手を引かれ、導かれた僕は門をくぐり、海への入り口―――文字通り入り口に立った。そこには、おそらくは係留された船へと降りるためのものであろう、石の階段が海面まで降りていた。そこから見る海は、まるで遥か昔に想像されていたような、遥か地の果てで滝のように落ち込んでいるに違いないと信じさせるような、そんな巨大で得体の知れぬ海だった。この庭を通った者だけに姿を現す、底知れぬ海の顔だった。

２m程度の波であれば、その庭に容易に届いたであろう。しかも、その庭には家が建っていた。もっとも、僕達が来たときには人の姿もなく、雨戸は閉ざされていたが、それほど荒れているようには見えなかった。夏の間だけのものなのかもしれない…。

僕はこの庭に名を与えた―――「私たちの庭」と…。

この曲には、私たちの庭の背中と、その肩ごしに盛り上がる海を思わせるような、底知れぬ奥行きを感じる。そして同時に、生命を育むというより、温めたフラスコを、ゆっくりと時間をかけて揺らしながら生命を培養してきたというような、海の不可思議な技(わざ)をも思わせるのだ。